

特集 最先端医療を支える解剖学

【巻頭言】

富田 江 一 (徳島大学大学院医歯薬学研究部機能解剖学分野)

丹 黒 章 (徳島大学大学院医歯薬学研究部胸部・内分泌・腫瘍外科学分野)

2019年5月1日から始まった令和元年, その年末に中華人民共和国湖北省武漢市において発生した新型コロナウイルス感染症は, 瞬く間に世界中に拡散し, 世界保健機関(WHO)はこのウイルスをCOVID-19と名付け, 3月11日にはパンデミックが宣言された。56年ぶりの東京オリンピックも, 聖火リレーが始まる直前の3月24日には, 来年7月まで1年間の延期が決まった。阿波踊りも4月早々中止が決まった。日本における感染はやや下火になりつつあったが, 4月7日に発令された緊急事態宣言は5月25日には全面解除となったものの, 移動制限解除の6月19日以降Go To Travel Campaignなどの迷走もあり, PCR陽性者は増え続け, 7月の海の日, スポーツの日が続く4連休の後から, 全国の感染者は1日1000名を超えた。その真ただ中の8月2日(日)に第261回徳島医学会を開催した。通常開催は難しく, 会場の徳島県医師会館ホールには関係者のみにご参加いただき, “With Corona”時代の先駆けとして, Zoomと徳島県医師会のネットワークを介したWeb配信による初めての徳島医学会であった。

この度のシンポジウムのテーマは「最先端医療を支える解剖学」とした。解剖学者である岡山大学大学院医歯薬総合研究科長の大塚愛二教授には「進化する医学教育」というタイトルでZoomを介した特別講演をお願いした。医学教育の歴史を振り返るとともに医学教育の現状と将来展望についてご講演いただいた。

系統解剖は医学を志す者が最初にくぐる門であり, 初学者である医学生はこの実習を通して詳細な人体解剖だけでなく生命に対する尊厳を学ぶ。しかし, この実習は白菊会会員の“医学の伝承と進歩への貢献”という崇高なご篤志によって支えられている。

日本における篤志献体の臨床医学への応用は2008(平

成20)年の北海道大学腫瘍外科学分野 近藤 哲教授のまさに執念ともいふべき厚労科研究「外科系医療技術修練のあり方における研究」に始まる。2012(平成24)年4月には日本外科学会と日本解剖学会が「臨床医学の教育及び研究における死体解剖のガイドライン」を公開し, 学生実習や解剖学研究に限定されていた献体の使用が, 医師及び歯科医師の手術手技研修のほか, 新たな手術法や医療機器の研究開発に対しても可能となり, 日本外科学会にCadaver Surgical Training(CST)推進委員会が発足した。厚生労働省の補助事業「実践的な手術手技向上研修事業」によってモデル校での研修が始まり, 全国へCSTの実施が拡大している。

Web参加いただいた四国こどもとおとなの医療センター統括診療部長の東野恒作先生には徳島大学におけるクリニカルアナトミーラボ立ち上げの経緯について, 徳島大学病院クリニカル教育・研究センターの後東知宏特任准教授から整形外科領域における, 胸部内分泌腫瘍外科学分野の吉田光輝講師から呼吸器外科における現状を, 西野豪志助教から食道癌の検査や術式開発の研究報告が行われた。富田江一教授からはCT画像を併用した新しい系統解剖実習の様子が紹介された。最後に丹黒からは先進医療を支える解剖学の歴史とこれからの展望, 医学教育における学生のモチベーションの重要性について講演させていただき, 医学教育を支えてくださる白菊会会員の皆様への感謝の念を再度確認して会を終えた。

徳島医学会初めての試みとなるWebによるリモート講演会の開催にあたっては徳島県医師会会長の齋藤義郎先生, 生涯教育委員の本藤秀樹先生, 三谷弘先生, プログラム委員の川原弘行先生, 水口潤先生, そして県医師会事務局のスタッフの方々には多大なご協力とご支援を賜り, 衷心よりお礼申し上げます。